

# 人間中心主義を超える土

太陽や水、空気のエネルギーによって草木は生育し、土壌の中では、あらゆる生き物たちが互いに働きあつて肥沃な土を育もうとしている。人間もまた、その恵みを存分に受け、大自然のメカニズムの中で生かされている。

しかし、近現代の考え方は、自然と人間とを分離し、人間が住みやすい環境づくり、人間にとって安全な暮らし、人間中心の価値観を追求することが良しとされ、思い通りにならないものは「苦」として排除される。

本当にそれは豊かと言えるのだろうか。むしろ、人間中心の考え方が、生命力を低下させ、一つの価値観でしか考えられないという「苦」を背負うようになってしまったのではないだろうか。

高度経済成長の真つただ中の昭和三十年代より、化学肥料、農薬を使わない自然栽培を続けてきた須賀一家では、人間中心ではない、大自然の仕組みに沿った農業が営まれている。九代目として農家を継ぐ須賀利治氏は、次のように語る。「土はいのちの源なんです」

その大自然に向けるまなざしにこそ、現代の「苦」から解放され、大自然の中で生きるものとして本当の豊かさを知るヒントが隠されている。



「生まれて来る子どもにも  
滋味豊かな野菜を食べさせたい」

私の家は九代続く古い農家です。祖父の代までは、野菜や米を作るのはもちろん、畜産、養蚕で生計を立てていました。父・一男が十五歳のときに原因不明の病を思い、そのことを機に父は自然農法というものに出会いました。

体がけたるく、ご飯を食べると吐き気がする。医者からいろいろな薬をもらっても効果は表れず、体は衰弱していきましました。七十キロあった体重は四十キロ台まで減り、視力も衰え、気分までも落ち込み、夜も熟睡できない日々が続きます。しまいには医者からも見放され、もう自分はこのまま死んでしまうのだと考えるほどだったと言います。

死が迫ってくる恐怖を感じながらも、父は心のよりどころを探そうと、薬をも掴む思いで聖書や哲学書などの本を読み漁りました。その中で出会ったのが、「体の中にある曇りが原因している」という自然農法家・岡田茂吉氏の言葉でした。

その考えの中には、食物が健康に与える影響の大きさが記されており、「医食同源（病気を治す薬と食べ物は本来根源

を同じくするものである）」「身土不二（人間の体は住んでいる風土や環境と密接に関係している）」に基づいた自然農法にひとつの希望を見出しました。

本格的に自然農法を始めたのは、昭和三十二年。当時は高度経済成長の真つただ中で、たくさん売るために、きれいで大きく形の揃った野菜を作ろうと、多くの化学肥料、農薬、除草剤が撒かれていた時代でした。現在はその毒性の強さから製造中止となった、有機リン系やドリオン系と呼ばれる農薬も当たり前のように使われていたと言います。父は岡田茂吉氏の自然農法を実現するために、化学肥料や農薬を使わない栽培はできないだろ

うかと考えたそうです。

昭和三十二年というのは、父が結婚をして私が生まれた年でもありました。農家出身の母・サカ江もその考えには賛成で、「生まれて来る子どもにも滋味豊かな野菜を食べさせたい」と二人は意気投合し、試しに農地の一部を使って始めました。

しかし、自然農法の考え方は分かっているても、その具体的な指図書が当時はまだなかったために、何から始めたらいいのか、どのような方法で作物を育てたらいいのか、手探り状態です。それまで行っていた化学肥料と農薬を使った慣行栽培を止め、化学物質を一切使わない方法に切り替えると、農地は

農薬中毒による、禁断症状。に陥り、収量は一気に減ってしまいました。

時代の流れに逆らうように自然農法を始めた両親に、周りからは冷たい視線が向けられます。

「あんなさまでとはとても百姓じゃ食っていけない」「いま時、肥料なしで作物を育てるなんて飯を食わせないで子どもを







育てるようなものだ」と噂をされ、誰も理解してくれない。そういう時期が何年も続きませんでした。その頃のことはさすがに覚えていませんが、物心ついた頃から両親の農作業を手伝っていても、その姿はいつも苦難の連続だったように思います。

自然農法が軌道に乗り始めたのはそれから約十年後、私が中学生の頃です。そのきっかけをくれたのは、自然の姿でした。

### 自然のあらゆる生物の営みが 生命力あふれる土をつくる

私たちの畑の隣に昔、竹やぶがあり、そこは誰も手入れをしていないのに、植物が逞しく生育していました。その様子を見て父は、「自然の森は肥料もやらないのに、みな健康に育っている。これはどういうことなのだろう」と、疑問に思ったそうです。竹やぶだけに限らず、畑の竹やぶに近い場所ほど作物がよく育っていました。そこで、何か秘密があるのではないかと調べてみることにしました。

そこは何年もかけて幾重にも積み重なった落ち葉が土壌を埋め尽くしてしま

た。土を踏んでみると、ふんわりとした絨毯のように軟らかい感触がして、触ってみると、自分たちの畑にはない香ばしい匂いがしたそうです。さらに土壌を開鑿してみると、植物が朽ちてバクテリアやミミズなどの土壌生物によって分解された腐葉土が広がっていることが分かります。自然の中で培われた養分が植物の生育を助けると気付いた父は、その状態を自分の畑にも再現してみようと考えました。

そして、堆肥づくりが始まりました。模範とするのは、もちろん自然の姿です。自然農法では、なるべく作物に近い素材を使うことがよいと考えられていたため、例えば、水田に使う堆肥は河原から集めて来た萱や藁など水辺のイネ科のものを使います。

まずは萱を細かく切って、十分に水で湿らせます。水分量が堆肥づくりにはとても重要で、手でぎゅっと握って少し水がにじみ出るくらいの状態にした萱と乾いた萱を交互に積んでいきます。すると萱は発酵を始め、そこに菌や虫、トビムシや団子虫、ヤスデなどの分解者が集まって来て堆肥を作ってくれます。分解の担い手であったさまざまな微生物や小動物もいずれは土となり、最終的には

栄養分の豊富な堆肥が出来上がるといっわけです。

堆肥が出来上がっていく様子を見ると、土はたくさんの協力者によって育まれ、その栄養分がまた次のいのちを育もうとしているのが分かります。つまり、土はいのちの源なんです。それなのに、化学肥料や農薬を用いることで、土の中の生き物たちを殺してしまうどころか、本来土の持っている「いのちを育む力」がどんどん失われていってしまいます。

ある研究結果で、化学肥料などを使わずに作られた米と、肥料や農薬を使って作られた米を、同じ条件下で十年間保存したそうです。驚くことに前者は十年間形を変えずにそのまま残っていました。後者はその反対で、腐って形自体が消えてなくなっていました。また、縄文時代の遺跡から、人間が食べたどんぐりの実が発見され、そこから芽が出たという研究結果もあります。一万年続いた縄文時代のどんぐりが現在までの長い年月を生き抜いていたのです。もちろん、縄文時代に農薬や化学肥料なんてありません。自然の仕組みの中で育まれたものは、それだけ生命力が強いのだということが分かります。



同じことを普段、野菜の状態を見ても感じます。例えば化学肥料を使って作られたレタスは過剰に栄養が取り入れられているために、サイズも少しばかり大きく、色も濃く、とてもおいしそうに見えます。しかし、そのレタスを出荷したときに、短いものであれば、翌日にはおれてしまいます。一方で、自然の力だけで作られたレタスは、身はそんなに大きくないけれど、ぎゅっと締まっています、ずっしりと重い。市場に持ってい

て、さらに小売店で売る数日先までそのままの状態を保っています。

作物の根っこを見ても、その違いは一目瞭然です。肥料で栄養を取った作物の根は細く頼りないけれど、自然の中の栄養分を一所懸命に取ろうとした作物の根は土いっぱい広く張り巡らされています。前者は肥料によってほとんど栄養が入ってくるので根を張り巡らす必要がありません。つまり、土も野菜も怠け者になってしまうわけです。

### 「誰かのために」を考えた農業 そうでなければ意味がない

研究を重ねて実践していくうちに、父の体調はだんだん快方へと向かっていきました。そして、自然農法で作った野菜も少しずつお客さんに受け入れられるようになっていったのです。

いちばん最初に頂いたお客さんからの反応には、家族全員で喜びました。まだその頃は自然農法で作った野菜を市場に出荷していなかったのですが、その年は枝豆がたくさん出来過ぎて仲間うちで処理しきれなかったために、市場に持って行ったんです。すると、あとから「枝豆が甘くておいしかったからもう一度あの



枝豆を分けてくれ」という注文が市場に入ったそうです。自然農法という言葉もあまり知られていない頃でしたから、他の野菜と同じように売られていた中で、そう言ってもらえたというわけです。また、その後も「食の細い祖母が須賀さんのところで出来た野菜だけは食べてくれる」と言う人や、「病気の家族に食べさせたいからどんなやつでもいいから分けてくれ」とわざわざ東京からリュックサックを背負ってやって来る人もいました。薬ではありませんが、食べた人たちが心も体も健康になったと喜ぶ声が聞かれるようになったのです。

両親はそれまで行っていた畜産と養蚕を一切やめ、自然農法を全耕地に広げました。しかし、ここでもまた祖父の反対を受け、近所の農家からも冷たい視線を向けられます。畜産は県の品評会でも最優秀賞を頂いたことがあり、養蚕も地域で一番の取量を誇る、貴重な収入源だったからです。それでも、自然農法にはまだまだ研究が必要でしたし、あれもこれもでは体が持たないと感じた両親は自然農法一本でやっていこうと決心しました。大変な思いをしてきた両親の姿を見ながら、私も一緒に農業を手伝ってきたわけですが、今後どうなっていくか分から

ない自然農法に不安を抱くことはありませんでした。父は自然農法について言葉で教えるというタイプではなかったので、私は父の背中を見て学びました。そういう中で、両親の「家族に食べさせたいと思える野菜を作る」という信念を強く感じていましたし、その思いが結果として表れていく様子を見ては、もっと勉強して、たくさんの人に自然農法を広めたいと考えるようになっていました。

現代社会では、「誰かのために」という部分が希薄になってお金もうけや効率を重視した考えばかりが大きな価値となってしまうように感じます。その考え方がどんどん極端な方向へと向かい、いまは「野菜工場」といって、水と栄養分だけで作物を育てようとする水耕栽培などが流行っているようです。自然光ではなく、人間のつくり出した光で、水の中に必要な栄養、肥料を流して、その水を使って育てるという方法です。科学の発展という意味でいえば、確かにすごいことだと思えます。まったく手間が掛かりませんからね。完全に外部から遮断しているため、雑菌や虫が入る心配もないので、それが良いと考える人もいるようです。しかし、自然の厳しさからはずいぶん離れています。

「スーパーから何トンも欲しいと言われるから、それをなんとか賄おう」と。効率良く、大量に」といった部分に物差しを置いて野菜を作ると、「少量だけど、このにんじんは土の力で本当によく育って、味もおいしい。だから、あの人に届けてあげたい」と思っているのは、やっぱりまったく違うものが出るでしょう。

### 自然の仕組みに反しているから 思い通りにならない

大学を卒業して、本格的に農家を継ぎました。大学では、農業の勉強をしながら日本全国を回って自然農法に関わっている人たちに話を聞いたり、他大学の学生たちと共に自然農法の研究会に参加しては、さらに土の力、大自然の力の重要性を学んでいきました。

大学の頃の研究はもちろん役立っていますが、自分が生産者となって野菜を作っていると、その大変さを改めて痛感します。大学で実践的なこと以外に、概念的なことも十分に勉強してきたという自負があったわけですが、実際には思い通りにならないことばかりです。教科書通りにはいかないものだと思います。これ

までにやってきた勉強は遊びだったかなんて感じたりもします（笑）。

思い通りにならないことの連続ですから、とにかく一つひとつを受け入れて学んでいくしかないんです。仕事は早朝から始まり、夜遅くまで休む暇はありません。毎日同じ作業をして、毎年きちんと作物が取れるなんてことはありませんから、そのときの天候を見極め、作物の根や葉を一つひとつ見ながら次に何をしたらいいか判断する必要があります。

私は毎年記録帳を付けていて、失敗したこと、良かったこと、また、次にこうしたらもっと良くなるんじゃないか、と感じたことをメモしています。書くことの多くは失敗ばかり。記録帳を付け始めて三十年以上が経ちますが、いまだに書くことはなくなりません。

二〇一一年に起きた東日本大震災後、福島第一原発事故による放射能汚染の影響で、自然堆肥を作るために必要な萱や薬が使えなくなってしまうということがありました。土はいのちの源だと私は考えていますから、とても大きな損害です。これからどうしたらいいのだろうと一時は途方に暮れていましたが、土を肥やす働きがあると勉強したことのあった大豆を試しに畑に蒔いてみました。そして作





物が最大限に根っこが張れるように土を起こし、あとはとにかく土の力を信じてみる。やれることはすべてやり尽くして、あれから三年が経ちました。実際に出来ている収量はさほど変わりはありませんから、なんとか乗り越えることができたのでしょ。

また、昨年は台風の影響で大雨の被害にずいぶん苦労しました。水に浸かってしまえば作物はたとえ化学肥料を入れたとしても育つことはありません。とにかく水をかぶってしまわないように作物を高い所に植えたり、水の排水を良くするなどの工夫が必要です。作物によっては少し根を深く張れるように、耕耘の仕方を変えてみるなど、とにかく試行錯誤をして、これもまたなんと乗り越えることができました。

いままでに経験したことのないような事態が当然のように起こるのが、自然の世界です。経験の一つひとつに助けられながら、いまでは、困難な状況を少しは落ち着いて捉えられるようになったと思います。もちろん「瞬「やられた！」と思うのですが、そういうことがあるからこそ、次のステップに繋がっている、といった感覚でしょうか。それでもまた経験したことのない困難に出くわしたと

らせ、土の持つ本来の力を引き出そうと考えてやっています。

耕すとか耕さないというのは、ある意味手段であって、その前にもっと根本の部分について考えることがいちばん大事だと思えます。土の中がどのような状態になっていて、なぜ耕すことが必要なのか、どのように耕したらよいか、そ



須賀 利治 すか・としはる

自然農法生産者。1957年(昭和32)埼玉県生まれ。江戸時代から続く農家に生まれる。東京農業大学卒業後、父・一男氏の代から始めた自然農法を継ぐ。96年に、自然農法を实践する生産者を募って設立した国産有機栽培農業生産法人「有限会社豆太郎」を設立。同代表を務める。



したら——。それはまた自然を見つめながら考えていけばいいわけです。

「自然の恵み」と言いますが、それは大自然が一所懸命に知恵や工夫を与えようとしてくれているまなざしみたいなものだと思えます。人間も自然の仕組みを学びとろうという目を持つことができれば、農業に限らず、どこへ向かっていったら良いのか、学べることはたくさんあると思うのです。大自然の仕組みからそれているから、土も作物も人間も弱

の土地にあったやり方をその都度考えながら作業していこうと思えば、マニユアル通りに一つの答えに行き着くなんてことはなかなか難しいはず。

自然というのは、人間が太刀打ちできない神様みたいな大きな存在です。だから、尊重しなければいけないし、その仕組みに人間が順応していかなければいけないと思うんです。順応していくというと、人間中心の考え方に聞こえてしまうかもしれませんが、自然と向き合うための目や心を持つということ。

肥料もない、農薬もない中で、あらゆる力が互いに影響し合いながら生命力あふれる作物を作ろうとしている——。そういう瞬間を目の当たりにしていると、こんなにドラマチックなことはないと感じます。

そして、人間も、私を生んでくれた両親や

つていくといったおかしなことが起こってしまうのではないのでしょうか。

つまり、思い通りにいかない。というのは自然に逆らっているからなんです。人間中心の考え方が強い現代社会において、そういうことを頭の隅っこに置いておくことができれば、少しづつ何かが変わっていきけるのかなと感じたりもします。

### 生きる力を合わせていのちを育んでいく

自然農法とは何か——。不耕起、不除草、不施肥、無農薬など、農家によってさまざまな考え方がありますが、「私たちの行う自然農法とはこういうものである」と一言で説明するのはなかなか難しい。あえて私たちの考え方を言葉で表現するとすれば、「自然の仕組みに順応する」ということかもしれません。土や野菜の姿を見ながら、常に学んでいる。という感覚ですから、これといった一つの答えがあるわけではないんです。もちろん、農薬や化学肥料を使うことは絶対にありませんが、先にも申し上げました植物性の自家製堆肥のみで栽培することにだって、ただ肥料効果を狙っているわけではなく、あくまで作物の根を張

たくさんの人たちと出会ってきたこと、太陽や海、川、土、小さな虫たちまで、あらゆる存在の中で影響し合いながら成長していこう、向上していこうとしなければいけないと教えられているような気もするのです。

大変なことも多い世の中ですが、苦しいことがあればあるほど、新たな知恵を与えてもらっていると感じます。苦しいときこそ、そう思えることができれば、見え方も変わり、新しい世界が広がっていくのではないのでしょうか。

これからもっともっと寒くなっていくわけですが、プロッコリーも葱も白菜も、厳しい冬に育まれる野菜というのは、みんなその寒さに必死に耐えようとして一所懸命糖分を増やすんです。だから、甘みが強いです。春や秋の穏やかな季節の野菜とは全然違います。つまり、環境が厳しければ厳しいほど、優しい味わいが出るってことですよ。そういう姿を見ていると、やっぱり人間が野菜からも見ているのは、ビタミンとかミネラルといった栄養だけじゃない。「生きる力」をもらっているんじゃないか、って思います。そんなことも大自然の営みから教わったたくさんのことのひとつです。